

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 ～2011

課題番号：21720130

研究課題名（和文） 漢語文法史の視点による早期漢訳仏典言語研究

研究課題名（英文） A Study of the Language of the Early Chinese Buddhist Translations
from the Viewpoint of Historical Chinese Grammar

研究代表者

松江 崇 (MATSUE TAKASHI)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：90344530

研究成果の概要（和文）：本研究は、早期漢訳仏典言語の漢語史資料としての性質を、漢語文法史の視点から解明することを試みることを目的としたものである。主な研究成果は、五世紀以前の早期漢訳仏典にみとめられる文法現象について、それが当時の漢語の口語を反映したものであるのか、或いは原典言語からの翻訳の結果生じたものであるのか、といった問題を検討するための方法論を提出したことである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to explore the nature of early Buddhist Chinese translations language from the viewpoint of historical Chinese grammar. The key achievements can be summarized as follows: as regards peculiar grammatical phenomena characteristic to Buddhist Chinese translations written before fifth century A.D., we have submitted a rudimentary standard to judge whether they are a reflection of Middle Chinese or not.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：中国語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：漢訳仏典、漢語文法史

1. 研究開始当初の背景

漢語（中国語）の歴史的研究に携わるものにとって、上古漢語（殷～前漢）から中古漢語（後漢魏晉南北朝）にかけての間に生じた言語変化のメカニズムの解明は、極めて魅力かつ重要な課題だと言えよう。この間に生じた変化としては、複音節語の急増、代詞・

否定詞などの機能語体系の簡略化、動補構造の成立、音韻体系の簡略化など文法・語彙・音韻の各方面にわたる重要項目が挙げられる。

筆者は、数年来、主として上中古間漢語史における文法変化についての研究に従事し、疑問代名詞目的語の語順変化（SOV型からSVO型への変化）

のメカニズム、人称代名詞体系のいわゆる“格表示体系”の崩壊過程、人称代名詞の複数接辞の発生過程などについての論考を発表してきた。そしてその際、中古初期（後漢・魏晉南北朝）の言語資料としての早期漢訳仏典（後漢から隋代以前に成立したいわゆる古訳・旧訳の漢訳仏典）の重要性を認識するようになり、積極的に文法資料として用いるようになった。

漢訳仏典の文法資料としての価値は、①中国の非仏教文献にはみられない口語語彙・口語的（と推定される）な文法現象が豊富にみられること、②多くが言語の均質性が高いこと、③成立時期・地域が特定できるものが少なくないこと、④『経律異相』（南北朝梁代に成立）などの類書に引用された部分と対照することによって、現存言語の真実性（authenticity）が確認し得るものが少なからず存在すること、などである。しかしながら、実際には、非仏教漢語文献とは異なる文法現象がみられる場合でも、それを口語の反映であると認定することは、容易なことではない。その最も大きな要因は、漢訳仏典は畢竟、「翻訳言語」であり、原典である非漢語言語の文法体系の影響を大きく受けている可能性が排除できないということである。漢訳仏典にみられる文法現象を何の検討もなく、機械的に漢語の口語の反映とみなしていけば、虚偽の漢語文法史を描き出すことにもなりかねない。

そして、このような「非仏教文献にはみられない文法現象」を口語とみなすか、非漢語原典言語の影響とみなすかについては、慎重な検討を経ることもなく、ともすれば論者の恣意によって判断される傾向さえあった。今後我々が行うべきことは、漢訳仏典にみられる特有の文法現象が漢語の口語を反映したものであるのか否かを判断する検討を包括的に行うことであろう。このようにしてはじめて早期漢訳仏典を上中古間文法史の資料として有効に活用することができるはずだと考える。

2. 研究の目的

早期漢訳仏典言語の漢語史資料としての性質を、漢語文法史（上中古間文法史）の視点から解明することを目的とする。そしてその結果を踏まえつつ、早期漢訳仏典を資料として、従来の漢語文法史に対して、修正を行うこ

とをも目論むものである。

3. 研究の方法

以下のような方法により研究を進めた。

(1) 漢語史資料として用いるべき早期漢訳仏典を、現存言語の真実性、内容の具体性などの点を基準に選定する。

(2)(1)で選定した資料について、記述研究を行い、漢訳仏典に特有の文法現象を抽出する。そして、その文法現象が漢語の口語を反映したものであるのか、それとも原典言語の影響であるのか、或いは先行漢訳仏典言語の影響であるか、といった検討を行う。

(3)(2)を踏まえ、従来の上中古間文法史をより正確に記述し直すことを試みる。

4. 研究成果

本研究による成果は以下の三点にまとめられる。そのうち最も主要な成果は(1)である。

(1) 早期漢訳仏典言語に特有のいくつかの文法現象についての「口語性」の判断とその方法論の確立

具体的には、(甲) 動作行為の完了を表す完了動詞「已」、(乙) 人称代詞の複数接辞、(丙) 疑問代詞目的語の語順、といった早期漢訳仏典にのみに見られる三種の文法現象が、当時の口語と如何なる関係があったかを検討し、これらはいずれも口語に由来するものであったこと、しかし「已」の特殊用法および人称代名詞の複数接辞については、必ずしも「直接的」に当時の漢語口語を反映したのではなく、口語における状況が出現頻度や用法の面でいわば「拡大され」て映し出されたものである可能性が高いこと、などを指摘した（論文「也談早期漢譯佛典語言在上中古語法史上的價值」、「早期漢訳仏典言語の上中古間漢語文法史資料としての価値」など）。

なお、このような文法項目の口語性の検討の際には、以下の三基準によるという方法を提案した（ただしこの方法は五世紀の鳩摩羅什以前の漢訳仏典のみに有効）。

① 当該の特殊な文法現象において自然言語に由来するとみなされる複雑な文法規則が見出される場合、その文法現象は漢語の口語と何らかの関

係があると推定できる。

②もし当該の文法現象が、同時期の複数の翻訳者により訳された多くの漢訳仏典に共通してみとめられる場合、その文法現象は漢語口語を反映したものである可能性が高い。

③上記①②により当該の文法現象が口語を反映したものであると推定され、かつ原典言語に当該の文法現象と対応する文法現象が存在しない場合は、その文法現象が出現頻度や用法の面でも、原典言語の影響を受けたものである可能性は低い。

(2) 早期漢訳仏典を主資料とした上中古間文法史の修正

三世紀の江南で成立した『六度集経』の疑問代詞体系について悉皆調査を行い、その体系が同時期の中原地域で成立した早期漢訳仏典に比して、口語として「古い」体系を保存している可能性があること、またそのような江南方言の「古さ」は、五世紀以降に江南で成立した漢訳仏典からは看取されないことを指摘した。

具体的には、『六度集経』にみられる「焉」、純粹疑問を表す連用修飾語「何」、「孰」、「ゼロ疑問代詞」目的語、「何等」の欠如、「云何」が述語のみを担う現象、といった疑問代詞或いはそれに関連する文法現象について、『中本起経』、『雑宝蔵経』、『過去現在因果経』などの成立地域・時期を異にする他の早期漢訳仏典言語における状況と比較しつつ、それらの文法史上の位置を検討するという方法を採用した。

そして、もし『六度集経』の疑問代詞体系が同時期の中原地域で成立した早期漢訳仏典に比して、口語として「古い」体系を保存しているという推定が正しければ、従来、ともすれば上古かから中古へと単線的に描かれてきた上中古間文法史は、地域差という視点から記述し直す必要があることを指摘した(論文「『略談《六度集経》』言語的口語性」、「『六度集経』言語の口語性について—疑問代詞体系を例として—」)。

(3) 早期漢訳仏典を言語資料とした個別の文法項目の研究

早期漢訳仏典が当時の多くの口語成分を反映し、また登場人物の会話場面が描かれることが少なくないという漢語文法史研究資料としての優位性に着目し、従来の研究では必ずしも

本格的な運用が行われてこなかった歴史語用論(Historical Pragmatics)の観点を取り入れる試みを行った(学会発表「漢語歴史詞彙研究芻議」)。

具体的には、早期漢訳仏典のみにその存在がみとめられる特殊な人称名詞「子」——指示対象に対する「敵意」とも表現すべき感情的ニュアンスを伴う三人称名詞「子」——について歴史語用論の観点を援用しつつ検討を加えた。そして、同時代の非仏教文献に「近称指示詞+子」というフレーズがみとめられること、またそれがしばしば指示対象に対する敵意を表す文脈に用いられることに注目し、元来は文脈の意味であった「敵意」という感情的ニュアンスが、「近称指示詞+子」フレーズから近称指示詞が脱落する過程を経て、「子」に「のりうつた」のではないかという推定を提出した。

以上の本研究の成果のうち、上記(1)(2)については、中国語で執筆した単行本(『古漢語疑問代詞賓語詞序変化機制研究』)の中にまとめて収録されることとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

①松江崇「也談早期漢譯佛典語言在上中古語法史上的價值」、『漢語史學報』第八輯,2009年9月,114-132頁,査読有

②松江崇「略談《六度集経》語言的口語性」,佐藤鍊太郎・鄭吉雄主編『台日學者論經典詮釋中的分析』,台湾學生書局,129-166頁,2010年6月,査読無し

③松江崇「『早期漢訳仏典言語の上中古間漢語文法史資料としての価値』」,『饜饕』第18号(中国語学会),112-141頁,2010年9月,査読無し

④松江崇「『六度集経』言語の口語性について—疑問代詞体系を例として—」,佐藤鍊太郎・鄭吉雄主編『中国古典の解釈と分析—日本・台湾學術交流の記録』,2012年4月,95-126頁,北海道大学出版会,査読無し(上記②)

の日本語版)

〔学会発表〕(計 3 件)

① 松江崇「也談上古漢語否定句中的代詞賓語前置現象(初稿)」、「東ユーラシア言語研究会第 17 回例会」,2010 年 7 月 4 日,於青山学院大学(東京都)

② 松江崇「淺談楊雄《方言》中的語言層次問題—以“江淮”方言為例」,首屆中国地理語言暨中日方言保存利用國際學術研討会」,2010 年 11 月 22 日,於北京西郊賓館(中国)

③ 松江崇「漢語歷史詞彙研究芻議」,第二屆漢語歷史詞彙與語義演變學術研討会」,2011 年 6 月 8 日,於金溪山莊(中国)

〔図書〕(計 1 件)

① 松江崇『古漢語疑問代詞賓語詞序變化機制研究』,全 286 頁,好文出版(東京),2010 年 2 月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松江 崇 (MATSUE TAKASHI)
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号: 90344530

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし